



子どもたちに平和な未来を 2025 「その時、私は子どもだった ～被爆・戦後 80 年の想い～」 を開催しました！

7月21日（月・祝）に「子どもたちに平和な未来を 2025」を開催しました。「子どもたちに平和な未来を」は千葉県生協連と千葉県内の4つの地域生協（パルシステム千葉、コープみらい、生活クラブ、なのはな生協）による実行委員会形式で運営され、子どもたちに「平和の大切さ」と「核兵器の廃絶」を訴える取り組みを毎年おこなっています。

被爆・戦後 80 年を迎えた 2025 年度は、被爆の実相を伝えることをテーマに「その時、私は子どもだった～被爆・戦後 80 年の想い～」と題し、各生協が参加を呼びかけました。幅広い年代やご家族での申し込みがあり、当日参加の方を含めて 43 件 76 名（子ども 27 名大人 49 名）が参加されました。

主催者挨拶では高橋由美子実行委員長（パルシステム千葉理事長）より子どもたちに向けて平和を伝える活動をおこなう本企画の主旨や、被爆・戦後 80 年という節目の年に被爆について学ぶ機会の意味についてなど話がありました。

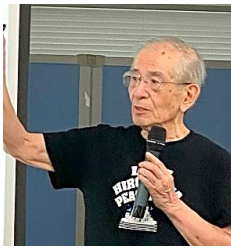
はじめに、不二女子高等学校演劇部と演劇部 OB8 名による朗読劇「サダコのメモ」が上演されました。「サダコのメモ」は、子どもたちの参加が多い本日の企画のために新たに脚本を書きいただき、初めて上演されました。2歳の時に被爆した佐々木禎子さんは、被爆から 10 年後に突然白血病と診断され、病室で折り鶴を折り続けました。折り鶴が平和への祈りを込めて折られるようになった



きっかけとなった方です。朗読劇では登場人物になり切った演技に会場は静まり返り、涙する方も見受けられました。

その時 2 歳だった中村紘さんは、「平和と平等といのち」というお話をされました。原爆の恐ろしさを生活の身近なものや、動物の大きさに例えたり、物事を





多方面から理解する大切さを月の満ち欠けで例えたりと、子どもたちがイメージしやすいように説明されました。

休憩のあとは、グループで朗読劇や、中村さんのお話の感想や考えたことなどを話し合いました。



小谷孝子さんは、原爆で亡くなった幼い弟の代わりだという相棒のあっちゃんと一緒に腹話術による自身の被爆体験を話されました。ご自身が当時見たこと、被爆者ということでご自身が体験されたことなどを優しい語り口



で、あっちゃんに話しかけながら、話されました。「みなさん、世界中にお友達をたくさん作ってください。お友だちの国を攻撃しようとはおもわないですね。それが平和につながると思います。」と参加者にメッセージをくださいました。

最後に中村さん、小谷さんから平和のバトンが不二女子高校演劇部へ渡されました。



●参加しようと思ったきっかけ

・世の中に戦争が再び忍び寄ってきている気がして子どもたちに考えてほしかった・子どもの聞いてほしかった・父母が戦争体験者だったが既に他界。もっと聞いておけばよかったと後悔していたの。・被爆戦後80年平和について考える1日にしたかった。

●感想

・戦争＝怖いで終わっていたが、次の一步どうするのか、何ができるのかを考えるきっかけになった（大人1人子ども1人で参加）・朗読劇、後援を聞いて涙が止まらなかった。胸が締め付けられ、世界平和をより一層願っていきたい（大人2人子ども2人で参加）
・世界から核をなくすためにも私たちが次世代に伝えなければ（大人1人で参加）・子どもと一緒に家族で話し合いたいと思います（大人1人子ども1人で参加）

